

カメリアタリエンス <http://www.chatabi.net/chatabi/7892.html>

『カメリアタリエンス』という別物だという。植物学者のY先生にその違いを伺ってみた。今回の旅では、従来のお茶の専門家という概念ではなく、この植物学という観点から、詳細なお話をして下さるY先生の存在は実に貴重であり、また新鮮であった。

お茶の樹は、ツバキ・サザンカと同じツバキ科の多年性植物で、学名を「カメリアシネンシス」という。茶樹の品種は大別して、中国種（シネンシス）とアッサム種（アッサミカ）の2種である。中国の雲南省などにある茶樹王と呼ばれるような大木の多くは、カメリアシネンシスではなく、同種であるカメリアタリエンスではないかという。確かになぜ茶の木があんなに大きくなるのか、不思議に思っていたが、やはり違うものだったのだろうか。

カメリアイラワジエンシス

<https://www.kirin.co.jp/entertainment/museum/history/tea/story1b.html>

この他、チャの仲間には他にターリエンス (*C. taliensis* 中国) やイラワジエンシス (*C. irrawadiensis* ミャンマー) が確認されています。

高木 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E6%9C%A8>

高木は、植物学の用語で、木本のうち、樹高が5mを超える植物のことである。

中国では、栽培種を大葉種・中葉種・小葉種の3つに区分しており、それぞれを交配することで、各土地に適した品種が植えられています。

中国小葉種 中国大葉種

<https://allabout.co.jp/gm/gc/218660/2/>

それが現在主流の分類の基となった「中国種 (*Camellia Theifera* var *bohea*)」、「中国大葉種 (var *macrophylla*)」、「シャン種・ビルマ種 (var *burmensis*)」、「アッサム種 (var *assamica*)」という分類です。

アッサムジャイプール茶園の茶樹

葉が小さく（4～5cm）丸みがあり中国南部から東部を経て日本に分布する低木で寒さにも強いのが「中国種」であり、小葉種とも呼ばれています。

葉がきわめて大きく（20～30cm）、野生では樹高が20～30メートルにもなるインドのアッサム、マニプール地方に分布する高木で寒さに弱いのが「アッサム種」です。これは大葉種といわれるもので熱帯地方で紅茶用として栽培されています。

この2種類の間の中間の大きさを持った品種が「中国大葉種」、「シャン種」となります。「中国大葉種」は中国種よりは葉が大きく（12～14cm）、樹高5メートルに達するもので、葉の先端は丸く、中国の四川、雲南地方に分布します。また、「シャン種」は葉の大きさが16cmに及び、樹高4～10メートルに達するものでトンキン、ラオス、タイ上部、ミャンマー上部などに分布します。

四川省

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%9B%E5%B7%9D%E7%9C%81>

1

四川省（しせんしょう、中国語: 四川省、拼音: Sìchuān Shěng、英語: Sichuan）は、中華人民共和国西南部に位置する省。略称は川あるいは蜀。省都は成都。西北部はチベットの伝統的な地方区分でいうアムド地方の東南部、西部はカムの東部にあたる。また、東部の重慶は直轄市として1997年に分離した。



雲南省 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9B%B2%E5%8D%97%E7%9C%81>

雲南省（うんなんしょう、中国語：云南省、拼音：Yúnnán Shěng、英語:Yunnan）は、中華人民共和国西南部に位置する省。略称は滇（てん）。省都は昆明市。省名は雲嶺（四川省との境の山地）の南にあることに由来する。



トンキン

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%B3%E3%82%AD%E3%83%B3>

（ベトナム語: Đông Kinh / 東京、フランス語: Le Tonkin）は、紅河流域のベトナム北部を指す呼称にして、この地域の中心都市ハノイ（河内）の旧称である。



マニプル州

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%83%97%E3%83%AB%E5%B7%9E>

マニプル州（ベンガル文字表記：মণিপুর、英語：Manipur）は、インドの東部にある州の一つ。インドの北東端で、ミャンマーに国境を接する。中心都市インパール。22,327平方キロメートル、2,388,634人。



檜山

<https://fan-akita.sakigake.jp/project/detail/113>

300年ほど前の江戸時代中期に栽培が始まった秋田県能代市の檜山茶（ひやまちゃ）。ここ20数年、檜山茶の生産に携わってきた梶原啓子と申します。

“北限のお茶、といわれ、商業生産されている日本茶の産地としては国内最北の地でお茶づくりに関わってきました。

檜山茶は京都の宇治茶にゆかりを持ち、江戸時代から檜山地域の武士の製茶として根付いてきた歴史があります。最盛期には200戸ほどで生産され、地元には伝統的な製茶の技法が残っています。私は、より味わい深いお茶を求めて、日本茶の本場、静岡県に通って製茶の技を高めようと努めてきました。

杜仲茶

<http://www.eucommia.gr.jp/eucommia/>

杜仲の原産国である中国では、数千年も前から杜仲の

「樹皮」を医食同源の食品として利用していました。

杜仲の樹皮に含まれるリグナン成分は、抗ストレス、更年期障害、血圧降下、滋養強壮に有用であることが現代の医学でも証明されており、日本でも樹皮は医薬品に指定されています。

げんのしょうこ茶

<http://tea-clip.com/gennosyouko-cha/>

ゲンノショウコは、フウロソウ科フウロソウ属の、日本原産の多年草です。名前の由来は「(胃腸に)実際に効く証拠」から来ており、下痢止めや胃薬として用いられます。効果の得られる整腸生薬であることから、「イシャイラズ(医者いらず)」「タチマチグサ(たちまち草)」などといった異名も持っています。

ゲンノショウコを健康茶にした「ゲンノショウコ茶」についても同様に、下痢や便秘といった症状に対してその改善目的で飲用されています。健康茶にする際は葉、花、茎を利用します。

ギムネマ茶

<https://www.wachaclub.com/dictionary/archives/1151>

ギムネマ・シルベスタ（ガガイモ科ホウライアオカズラ属）

インドや東南アジアに自生する、「ギムネマ・シルベスタ」という植物の葉が使用されています。

ヒンドゥー語で「砂糖壊し」という異名を持ちます。ギムネマ・シルベスタの葉に含まれる、ギムネマ酸の働きにより、甘みを感じる舌の感覚が一時的に麻痺し、甘さを感じなくなることからこう呼ばれているそうです。

おもな成分：ギムネマ酸

グアバ茶

<http://www.herb-t.net/quavatea.html>

グアバの葉：夏場に成長する。大きな葉では20cm位になる。

ポリフェノールの1つであるタンニンが世界中の植物の中で最も多く含まれています。このタンニンは「抗酸化力」と「免疫力を高める作用」があり、アトピーや花粉症などのアレルギー症状に有効であると言われています。

グアバ茶に含まれるグアバ葉ポリフェノールという成分が糖を分解してブドウ糖にする酵素の働きを抑制するこのうがあるとされます。このことから血糖値上昇が抑えられて、糖尿病の予防に効果あると言われています。

ウイキョウ茶

<https://nukada.jimdo.com/%E8%96%AC%E8%8D%89%E5%9C%92/%E8%96%AC%E8%8D%89%E5%9C%92%E8%B1%86%E7%9F%A5%E8%AD%98%E3%82%A6%E3%82%A4%E3%82%AD%E3%83%A7%E3%82%A6-%E3%83%95%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%8D%E3%83%AB/>

ウイキョウ（フェンネル）

寒さの中でも、こぼれ種であちらこちらに出てきて生き生きしているのは、ウイキョウです。生薬名では茴香と書きます。胃腸薬や香辛料に用いられる薬用植物です。一般では、スイートフェンネルと云う方がよく分かるかもしれません。

学名は、*Foeniculum vulgare*といい、原産地は地中海沿岸、セリ科の植物です。南ヨーロッパのものは草丈は1m内外だそうですが、日本産は2mほどにも生る大型の多年草です。茎葉は青緑色で、枝分かれしたような細かい葉が羽状複葉でつき、生長すると茎の先端に傘の骨のように1カ所から同じ長さで伸びた先に更にもう一度同じよう枝分かれした先に、6月～8月頃小さな黄色い花をつけます。

やがて5本の線のある果実がつき、その果実が生薬となります。生薬名は茴香（ういきょう）で、芳香性健胃、駆風、去痰薬などに用いられます。駆風とは、胃腸に溜まったガスの排出を促進することです。

日本には平安時代に中国から薬用として入ってきて、薬用として栽培されてきました。長野県、鳥取県が主な生産地ですが、今日では薬用の他に、多くはスパイスとしての利用が多くなっています。

ウコギ茶

http://www.p-atlife.com/01kenkou/015_ukogi-tea.html

ウコギはもともと中国の原産と見られ、平安時代中期の『本草和名』には五加という中国名で牟古岐（むこぎ）と読ませたヒメウコギが紹介されている。

ウコギの和名漢字、五加木はこれに由来しています。

専ら根や幹を煎じて薬用強壯剤として利用されたり、天日干にした根や皮を焼酎につけた五加皮酒などの原材料として用いられていました。

1603年（慶長8年）の『日葡辞書』ではVcoguiとして「根は薬用に、葉は和え物に、幹は酒に用いる」とあり、古代より広く使われておりました。

うこぎの葉や茎は、ビタミン・ミネラルが豊富で、特にビタミンA、ビタミンC、カルシウムがたくさん含まれています。また、ポリフェノールも含まれております。

クコ茶

<https://www.kenseien.co.jp/kenkou/1270.html>

クコには、肝機能の活性化、疲労回復、冷え症改善、目の疲れ回復、コレステロール値や血圧を下げるなどの効果があるとされています。

またビタミン類・ミネラル類、鉄分を豊富に含むことから、美容の面でも女性に人気があり、リノール酸はコレステロールを排出する作用がある為、ダイエットティーとしても注目されています。

包種茶(ほうしゅちゃ)

<https://www.iccworld.co.jp/tea/tea001.html>

別 名：

清茶（ちんちゃ）とも言われる

産 地：

台湾台北市郊外の文山地区

分 類：

青茶（限りなく緑茶に近い）

味&香り：

このお茶は味よりも香りだろう。一般的には蘭の花の香りと言われている。お茶を入れた時にたつ香気は青茶の中でも郡を抜いており、個人的には、自家製プリンの

砂糖をこがして作るカラメルソースを思い出すちょっとこうばしい甘さがする香りである。味はすがすがしく爽やかで清涼感が口の中に残る。

このお茶はおよそ150年前に福建省安溪の、とある人が作り始めた。完成したお茶を二枚の紙を使って四角く包み、茶名や屋号の印が捺されて売られていたもので、清代に光緒帝に献上された際にもそのままの形で納められ、その時に包種と呼ばれるのが由来とされている。

堆積

<https://dictionary.goo.ne.jp/jn/133723/meaning/m0u/>

1 いく重にも高く積み重なること。積み重なること。また、そのもの。「土砂が堆積する」「倉庫に貨物が堆積する」

2 水・風・氷などによって移動した岩石の破片や生物の遺骸(いがい)が、最後に水底や地表に静止し、集積する現象。

雲南省ランツァン県

◎雲南省 <http://www.cnta-osaka.jp/city/yunnan>



面積 約39.4万km²

省都 昆明市

人口 4,596万6,239人

主な特産品 藍染、大理石、少数民族による民芸品、プーアル茶、雲南コーヒー、雲南ワイン、三七人參

地域の概要 南はミャンマー、ベトナム、ラオスと国境を接し、北はヒマラヤ山脈に続く高山地帯です。美しい雪山、氷河、湖、温泉、原始森林、熱帯雨林など大自然に囲まれた理想郷であり、25の少数民族が住む多彩な地。また東南アジアと中国大陸を結ぶ経済、交通の窓口でもあります。

◎ランツァン県



瀾滄ラフ族自治県（らんそうラフぞくじちけん）は中華人民共和国雲南省普洱市に位置する自治県。ラフ族唯一の民族自治県となっている。

地理

瀾滄は雲南省南西部に位置し、南西部はミャンマーと国境を接している。横断山脈怒山山系南端に位置し、西高東低の起伏にとんだ地勢であり、山間部が全面積の98.8%を占めている。

歴史

1913年に鎮辺県が設置された。しかし1915年に重複県名を回避すべく瀾滄県に改称、1953年に県級の瀾滄拉祜族自治区に改編、更に1955年に現在の自治県となり現在に至っている。

ラフ族

<http://japanese.china.org.cn/ri-shaoshu/lahu.htm>

人口は45万3705人。

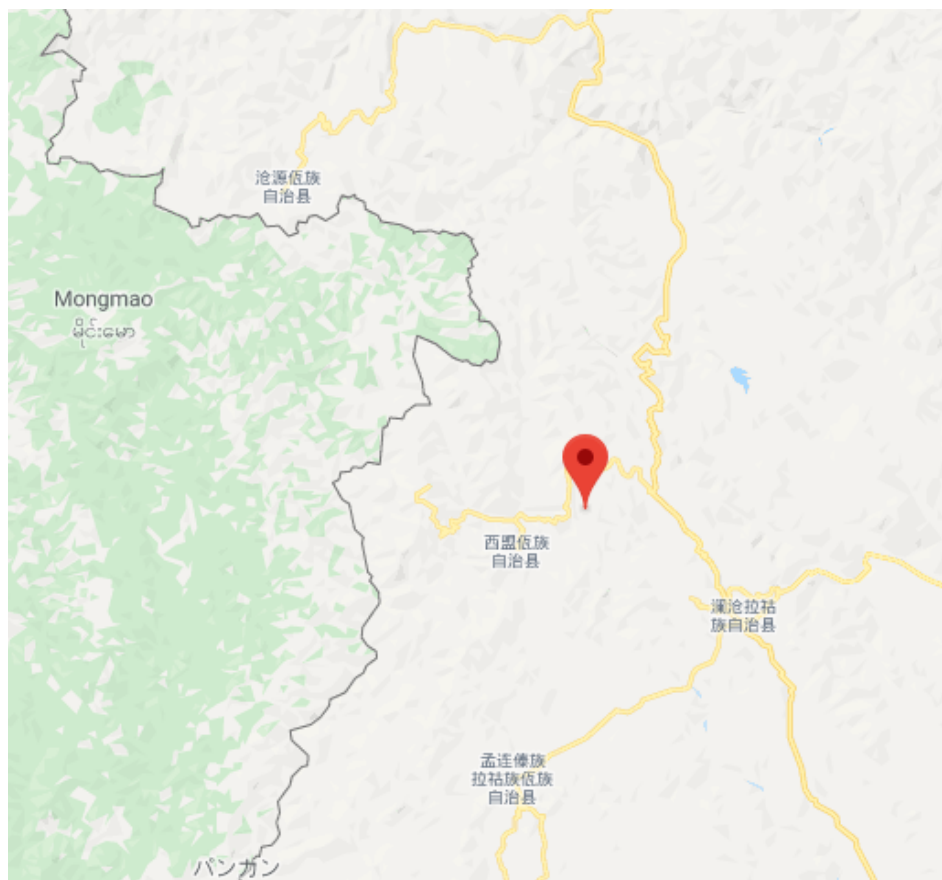
主に雲南省瀾滄県、孟連県に集中的に居住している。少数はその他の民族とともに雲南省南西の国境一帯の県に居住している。

ラフ語を使用し、この言語は漢・チベット語系、チベット・ミャンマー語派、イ語分支に属する。拉祜納と拉祜熙の二つの方言がある。ラフ族はなが年漢族、タイ族と仲良く付き合いってきたため、大多数のラフ族の人びとは漢語とタイ族の言葉を両方とも話せる。

清の時代の史籍の記載の中では、ラフ族は「俛黒」と称されている。ラフは民族の自称である。ラフ族の社会の発展はアンバランスで、20世紀40年代に大部分の地域が封建領主あるいは地主経済に入ったが、原始社会の残存をのこした地域もまだ一部にはあった。立ち遅れた耕作法を取っていた。新中国成立後、ラフ族の政治、経済、文化、教育、医療衛生などの諸方面で大きな発展を遂げている。

バンワイ 邦崴

<https://www.google.com/maps/place/Bangwai,+%E7%80%BE%E6%BB%84%E3%83%A9%E3%83%95%E6%97%8F%E8%87%AA%E6%B2%BB%E7%9C%8C+%E6%99%AE%E3%82%B8+%E9%9B%B2%E5%8D%97%E7%9C%81+%E4%B8%AD%E8%8F%AF%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD/@22.6374028,98.9581399,9z/data=!4m5!3m4!1s0x372b3d65ff836ced:0x4de75e2374e22460!8m2!3d22.694469!4d99.695254>



Bangwai邦崴

瀾滄ラフ族自治県 普シ 雲南省

屹立(きつりつ)

<https://dictionary.goo.ne.jp/jn/53025/meaning/m0u/>

- 1 山などが高くそびえ立つこと。「市街には高層ビルが屹立している」
- 2 人が動かずに立っていること。

景頗 ジンポー

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/minzu/29/29.htm>

人口は約11万9209人。主に雲南省徳宏ダイ族チンプオ族自治州の口西、瑞麗、隴江、盈江、梁河などの県の山間部に集中的に居住し、付近の州・県の山間地帯は少数のチンプオ族の人たちが分散して居住している。

チンプオ族の人びとは雲南徳宏地区の原住民族ではない。古代チンプオ族の人びとは西康・チベット高原の南部で生活していた。その後、横断山脈に沿って瀾滄江、金沙江一帯に移住し、明代の末期、清代の初期に徳宏地区に移住し、トーアン族、アチャン族、漢族などの民族とともに山間地帯で暮らしていた。

タリエンシス *taliensis*

https://www.gene.affrc.go.jp/databases-plant_images_detail.php?plno=5660010015

起源

日本へは、1969年にオーストラリアから導入された。

分布：雲南、貴州。

特徴

花：白色、10～12弁、花径5～6cm。1. 5cm前後の花梗がある。開花期は10～12月。

葉：長楕円形、長さ9～15cm、幅3～6cmの大葉。表面は鮮緑色、光沢がある。葉脈部がやや陥没し、葉面は波状を呈す。

利用

中国の雲南省から貴州省にかけて分布する大葉のチャの仲間。花も普通のチャより大型で、花弁数も多い。

ジノー族 基諾族

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%B8%E3%83%8E%E3%83%BC%28%E5%9F%BA%E8%AB%BE%29%E6%97%8F-167306>

中国、シーサンパンナ (西双版纳) タイ族自治州に居住する民族。人口1万 8400 (1990)。1979年に中国政府より少数民族として認定された。言語はシナ=チベット語族に属する。固有の文字はもたず、かつては木や竹を刻して意思伝達した。

言語や宗教、葬送儀礼などからみると、イ (彝) 族やハニ (哈尼) 族などとともに北方から移住してきたと考えられる。かつては狩猟採集を行い、中華人民共和国成立以前は焼畑耕作が主流であった。居住地のある基諾山では茶の栽培が盛んで、プーアル茶の産地として名高い。

涼ばん茶

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B6%BC%E6%8B%8C%E8%8C%B6>

涼拌茶 (りょうばんちゃ、Liang-pan tea) は雲南省南部で作られる中国茶。形態は飲用ではなく、生茶葉ないし干茶を用いたサラダ風の料理である。雲南省や隣接するミャンマー北部には酸茶やラペソーなど食用の後発酵茶がいくつか存在するが、これに対して発酵させない生の茶葉を用いるのが涼拌茶の大きな特徴となっている。

焼き茶

http://www.uloncha.com/f_chanorekisi.htm

中国の伝説では「農業や薬草の神」とされる「神農」が木陰で湯を沸かしているとき、一枚木の葉が鍋に落ちたが、その木の葉の落ちた湯が何とも芳しい香りがしたため、思わずその湯を飲んだ。これが「神農」の「茶の発見」といわれています。

この伝説を彷彿とさせるものとして、雲南省のタイ族やワ族に現在まで伝わる「焼茶」とよばれる飲み方があります。枝ごと摘んできた茶葉を囲炉裏で炒ると、そのまま湯の鍋の湯に入れぐらぐらと鍋で煮て飲む方法です。

陰干し茶

<http://www.o-cha.net/jiten/nihonocha/bancha.html>

番茶というと、つい下級品や規格外の安価なお茶のことだと思ってしまう。でも、今のような蒸し製の煎茶が民間に出回るようになったのは江戸時代の中頃以降

のことで、それまで各地各様の製法で自家用に作られていたお茶を総称して番茶と
いいます。

たとえば、福井県勝山市には秋に茶の枝を鎌で刈り、縄ですだれのように編んで軒
先に吊るしておくだけの、陰干し番茶があります。飲む前に鍋で軽く炒って煮出す
もので、ちょうど薬草と同じ方法で利用されています。その意味では、非常に古い
時代の茶利用の姿を残すものともいえるでしょう。

か せつ めい せん

<https://allabout.co.jp/gm/gc/218668/>

茶の原産地中国において、「茶」の字が初めて成立したのは唐代になり陸羽（りく
う）が『茶経（ちゃきょう）』（758年）を著したときだといわれています。

それ以前は「苦菜」（苦い味のする植物）一般を指す言葉として発展してきまし
た。そのため、「苦い」という意味を表示した「余」という文字をベースにして
「茶」の字が成り立っているわけです。

陸羽の茶経には唐以前の呼称として茶、**[木賈]（か）**、**設（草冠が付く：せつ）**、
茗（めい）、**舛（草冠が付く：せん）**と呼ぶのだと記載されています。そのほかに
も、[木茶]、[女宅]、選、過羅、物羅、詫、皋盧、瓜蘆など、十を下らなかったとい
われています。

福建省

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%8F%E5%BB%BA%E7%9C%81_\(%E4%B8%AD%E8%8F%AF%E6%B0%91%E5%9B%BD\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%8F%E5%BB%BA%E7%9C%81_(%E4%B8%AD%E8%8F%AF%E6%B0%91%E5%9B%BD))

福建省（ふっけんしょう、中国語:福建省、拼音:Fújiàn Shěng、英語:Fujian/Fukien
）は、中華民国の省。現在でも中華民国は同省島嶼部の金門島、烏坵島、馬祖島を
実効支配しており、金門県、連江県の2県が置かれている。



広東省

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BA%83%E6%9D%B1%E7%9C%81>

広東省（カントンしょう、中国語:廣東省（广东省）、中国普通話拼音:Guǎngdōng Shěng、広東語拼音:gwong2 dung1 saang2、英語:Guangdong）は、中華人民共和国南部に位置する省。隣の広西チワン族自治区と併せて「両広」と呼ばれる事もある。



神農（炎帝）

<http://chugokugo-script.net/story/shinnou.html>

神農（炎帝）は中国古代の伝説に出てくる三皇五帝（中国の神話伝説に登場する8人の帝王。三皇は神、五帝は聖人で理想の君主とされる）の一人で、女媧が亡くなった後、帝王の座につきました。

また、医薬の神でもあり、赤い鞭でさまざまな薬草を叩いては薬草の性質を確認したり、みずから百草を口に入れて薬草の効能を確かめ人々の病気を治しました。

古くから医薬の神として知られていた神農は、後漢に書かれた本草書（医薬書）『神農本草経』など、本草学の中にその名を多く残しています。

唐時代

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%94%90>

唐（とう、拼音: Táng、618年 - 907年）は、中国の王朝である。李淵が隋を滅ぼして建国した。7世紀の最盛期には、中央アジアの砂漠地帯も支配する大帝国で、中央アジアや、東南アジア、北東アジア諸国、例えば朝鮮半島や渤海、日本などに、政治・文化などの面で多大な影響を与えた世界帝国である。日本の場合は最も有名なのが遣唐使の派遣で、894年（寛平6年）に菅原道真の意見でその回の遣唐使を中止し、それ以降派遣しなくなるまでは積極的な交流をしていた。首都は長安に置かれた。

前漢時代

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%89%8D%E6%BC%A2>

前漢（ぜんかん、紀元前206年 - 8年）は、中国の王朝である。秦滅亡後の楚漢戦争（項羽との争い）に勝利した劉邦によって建てられ、長安を都とした。

7代武帝の時に全盛を迎え、その勢力は北は外蒙古・南はベトナム・東は朝鮮・西は敦煌まで及んだが、14代孺子嬰の時に重臣の王莽により篡奪され一旦は滅亡。その後、漢朝の傍系皇族であった劉秀（光武帝）により再興される。前漢に対しこちらを後漢と呼ぶ。

僮約 どうやく

<https://hajimete-sangokushi.com/2015/05/27/post-2835/>

前漢時代、蜀の文人である王褒（おうほう）が書いた「僮約（どうやく）」という奴隷売買の契約書に、最古のお茶に関する記述がみられます。

僮というのは「奴隷」のことで、この奴隷になすべきことを記した契約書があるのです。その仕事の中に、「武陽で茶を買う」という記述がみられます。

蜀は三国志の劉備が拠点を置いた場所です。劉備も王褒のように、茶を買いに走らせたのかもしれませんが。ちなみに、この頃はまだ、民間に喫茶の風習はなく、皇帝、貴族などの特権階級に限られていました。

省都

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9C%81%E9%83%BD>

省都（しょうと）とは、中華人民共和国・中華民国・ベトナムなどにおける行政区分としての省の政府の所在する都市。

成都

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%88%90%E9%83%BD%E5%B8%82>

成都市（せいとし/チェンドウシ、簡体字: 成都市、拼音: Chéngdū、英語: Chengdu）は、中華人民共和国四川省の省都であり、副省級市。豊かな成都平原の中にあって古くから『天府の国』と呼ばれてきた。唐の時代から蜀錦を産出するため錦城の別称を持ち、また芙蓉の花を市花とするところから蓉城の別称ももつ。



王褒 おうほう

<https://kotobank.jp/word/%E7%8E%8B%E8%A4%92-38858>

中国、前漢の文学者。資中（四川省）の人。字、子淵。宣帝のとき諫大夫となった。『九懐』『洞簫賦』などの辞賦を著わした。諧謔的な筆致で奴隷の境遇を描写した『僮約（どうやく）』は、当時の社会生活をうかがう資料として価値をもっている。

本草書 ほんぞうしょ

<http://honzou-seika.l-nic.co.jp/cts/faq/faq03/index.html>

漢方薬に用いられる植物、鉱物および動物のことを本草(ほんぞう)と呼びます。その機能を記した書を本草書(ほんぞうしょ)といいます。『神農本草経』(しんのうほんぞうきょう)は中国に現存する最古の本草書で、編纂されたのは後漢の頃で、『傷寒論』とほぼ同時代(紀元25~220)とみられています。『神農本草経』から始まった本草という学問の主な目的は薬効論におかれているため、中国医学における薬学と言えます。

神農(中国古代の伝説の神様)によって365種の本草が上薬・中薬・下薬・に分類されています。西暦1578年李時珍によって「本草項目」が編纂されました。掲載されている本草はさらに増え1900種にもものぼり、世界の博物学・本草学におおきな影響を与えています。日本でも徳川家康が愛読し、薬物学の基本文献とされています。

陸羽 りくう

<https://kotobank.jp/word/%E9%99%B8%E7%BE%BD-148483>

中国、唐の茶の研究者、隠逸の文人。別名は疾、字は鴻漸(こうぜん)、季疵(きし)。号は桑苧翁、東崗子。復州竟陵(湖北省鍾祥県)の人。生れは不明で捨て子ともいわれる。竟陵の智積禅師のもとで育てられたのち、ちょう溪(ちょうけい。浙江省)に移り住んで顔真卿の保護を受け、杼山(ちょざん)妙喜寺に三癸(き)亭を建ててもらった。著書に『茶経』(3巻)があり茶道の元祖として名高く、茶神として祀られている。

茶経 ちゃきょう

<https://dictionary.goo.ne.jp/jn/142502/meaning/m0u/>

中国の茶書。3巻。陸羽著。760年ごろ成立。茶の起源・製法・いれ方・飲み方・器具などを詳しく述べた最古の茶書。

粗茶

①粗茶・荒茶(あらちゃ)

<https://kotobank.jp/word/%E8%8D%92%E8%8C%B6%E3%83%BB%E7%B2%97%E8%8C%B6-2003853>

製したまま、ふるい分けをしていない茶。

<http://www.uloncha.com/rikuutochakei.htm>

ここでは「茶経」が著わされた当時の「茶」の種類について書かれています。

「茶」を分類して「そ茶」・「散茶」・「末茶」・「餅茶」の四種としている。この内「そ茶」は現在でいう「毛茶」にあたる半製品のように「荒茶」か、もいくは文字の意味通りの「粗茶」かもしれません。小生自身は「白牡丹」の低級品のよう、摘み取った葉のそのままの姿を残したものではないかと想像しています。つまり「茶葉」を天日乾燥しただけのものだと思っています。

<https://www.takagien.co.jp/?mode=f5>

茶経に書かれている、枝ごと切り落とし、その場で煮て飲むような未処理の「粗茶」はともかく、発酵させない蒸青緑茶で粉末状の「末茶」と葉の形を保ったままの「散茶」は、宋の時代に主流になっています。

②粗茶（そちゃ）

<https://dictionary.goo.ne.jp/jn/130721/meaning/m0u/>

粗末な茶。茶を人にすすめるときにへりくだってという語。「粗茶ですが一服どうぞ」

散茶

<https://e-chinatea.com/puerh/kind/>

沱茶、磚茶や餅茶のような固形茶と違って、名前通り固まらず「散」＝茶葉のままの物を指します。

末茶

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8C%B6>

『茶経』には茶の飲み方として、筒茶（そちゃ）、散茶、末茶、餅茶（へいちゃ）があるとされている。筒茶はくず茶、散茶は葉茶をいうとされ、餅茶は乾燥した茶葉を圧搾して固形にしたものである。末茶（抹茶）は餅茶を搗いて粉にしたものであり、7世紀にはこの末茶が主流であったと考えられている。

餅茶 へいちゃ

<https://kotobank.jp/word/%E9%A4%85%E8%8C%B6-1410784>

茶の具体的な内容は陸羽の《茶経》にくわしく述べられている。団茶あるいは餅茶と呼ばれ、蒸した茶葉を臼でつき乾燥させ、固められたものであった。

緑茶、紅茶その他の中・下級品や粉茶などを蒸して、いろいろな形状の型に詰め、煉瓦状、タイル状、円盤状、円錐状、碗状などに押し固めて乾燥したもの。7世紀以前の中国で行われていた餅茶の系譜をひくもので、製茶技術上の古い形態をとどめている。日本へは平安初期に入唐僧によって伝えられた。

窺う（うかがう）

<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E7%AA%BA%E3%81%86/>

- 1 すきまなどから、ひそかにのぞいて見る。「鍵穴から中を一・う」
- 2 ひそかにようすを探り調べる。「顔色を一・う」
「ライバル会社の動きを一・う」
- 3 一部分から全体を押し量って知る。それとなくようす、状況を察する。「意気込みのほどが一・われる」「その一斑(いっぱん)を一・うことができる」
- 4 ようすを見て、好機の訪れるのを待ち受ける。「逃走の時機を一・う」
- 5 一応心得ておく。
「弓射、馬に乗ること...必ずこれを一・ふべし」〈徒然・一二二〉
- 6 調べ求める。調べ探す。「近く本朝を一・ふに」〈平家・一〉

タチバナ

<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BF%E3%83%81%E3%83%90%E3%83%8A>

タチバナ（橘、学名：Citrus tachibana）は、ミカン科ミカン属の常緑小高木で柑橘類の一種である。別名はヤマトタチバナ、ニッポンタチバナ。

日本に古くから野生していた日本固有のカンキツである。本州の和歌山県、三重県、山口県、四国地方、九州地方の海岸に近い山地にまれに自生する。近縁種にはコウライタチバナ(C. nipponokoreana)があり、萩市と韓国の済州島にのみ自生する(萩市に自生しているものは絶滅危惧IA類に指定され、国の天然記念物となっている)。

羹(あつもの)

<https://nimono.oisiiyouri.com/atsumono-gogen-yurai/>

羹とは、古くから使われている熱い汁物という意味の言葉で、のちに精進料理が発展して「植物性」の材料を使った汁物をさすようになりました。また、植物に対して「動物性」の熱い汁物を「臛(かく)」といい、2つに分けて用いました。

宋(そう)

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%8B_\(%E5%8D%97%E6%9C%9D\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%8B_(%E5%8D%97%E6%9C%9D))

宋（そう、420年 - 479年）は、中国南北朝時代の南朝の王朝。周代の諸侯国の宋や趙匡胤が建てた宋などと区別するために、帝室の姓を冠し劉宋（りゅうそう）とも呼ばれる。首都は建康（現在の南京）。



徽宗皇帝（きそうこうてい）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%BD%E5%AE%97>

徽宗（きそう）は、北宋の第8代皇帝。諡号は体神合道駿烈遜功聖文仁德憲慈顛孝皇帝（退位したので「遜」（ゆずる）という文字が入っている）。諱は佖。第6代皇帝神宗の六男（第11子）。

書画の才に優れ、北宋最高の芸術家の一人と言われる。一方で政治的には無能で、彼の治世には人民は悪政に苦しみ、水滸伝のモデルになった宋江の乱など、地方反乱が頻発した。

大観茶論（だいかんさろん）

<http://www.tea-jp.com/tea/chabunka/book.html>

宋の皇帝徽宗趙佖が自ら書き上げた物、全書約2,800文字。1107年にできた書物。宋の時代における重要な中国茶書物。采摘、蒸壓、製造、鑑別、白茶、筩、水、点、色、味、香など20項目にわたって書かれてあります。製茶技術とお茶の品質を強調。

明の釜炒り茶

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%9C%E7%82%92%E3%82%8A%E8%8C%B6>

釜炒り茶（釜煎り茶。かまいりちゃ）は茶の製造方法の一種で、生茶葉から煎茶を造る最初の加熱工程（殺青）を「蒸す」のではなく「炒る」ことで行うものである。茶葉の仕上がりが針状ではなく、勾玉状になる。この形状から玉緑茶（たまりよくちゃ）、ぐり茶ともいうが、後述の蒸し製玉緑茶と区別するために、釜炒り製玉緑茶、釜ぐり茶ともいう。

<http://www.kamairicha.jp>

嬉野製釜炒り茶のはじまりは、日本で煎茶が普及する以前にまで遡ります。それは嬉野に中国・明の陶工が焼き物文化と同時に、自家用のお茶を栽培したことに始まります。1504年、陶工・紅令民が明から南京釜をもちこみ、本格的に炒葉製茶法を伝えます。

その後、大浦慶により海外にはじめて輸出された日本茶として、世界に日本茶を知らしめたお茶となります。550年もの歴史をもつ嬉野製釜炒り茶。いまでもその製法は受け継がれています。

ミアン

<https://www.olive-hitomawashi.com/column/2018/03/post-1628.html>

タイに伝わる噛む発酵茶・ミアン

噛み茶・ミアンとは

今回スポットをあてるミアンとはお茶の一種だ。お茶と言っても、多くの人が想像するような煎茶とは違う。ミアンの特徴はふたつ。"飲み物ではなく、食べる(噛む)ためのお茶である"ということと、"お茶そのものを発酵させている"ということだ。

ミアンは現地の人たちにとっては健康のためのアイテムとしても認識されているという。風邪や虫歯に対する予防策としてや、疲労回復、気付けとしても親しまれてきた。

いったい噛み茶・ミアンはどのように作られているのだろうか。

その製法はこうだ。ツバキ科植物ミアンの大きく立派な葉を摘み取ってかさねあわせて蒸し器で蒸す。それをツボに隙間なく詰め込んで行き、塩や水を加えて発酵熟成させていく。数か月から一年ほど寝かせて完成する。ミアンはいわば漬物に近い。噛みしめると苦味が溢れるが、タンニンやカフェインによる覚醒効果でガムのような役割も果たす。熟成の進んだものは酸味も伴った独特の香味を持っているという。

ヤマチャ 山茶

<https://seesaawiki.jp/tea/d/%bb%b3%c3%e3%a1%ca%a5%e4%a5%de%a5%c1%a5%e3%a1%cb%bc%ab%c1%b3%c3%e3%a4%c8%be%c6%c8%aa>

山茶（ヤマチャ）とは自生する茶のこと

山茶は焼畑耕作時に発見される事が多々ある。

茶の根は火に対して強い性質を持つため火入れを行っても根だけが

生き残り焼畑後2～3年頃から生育し始め

場所によっては5～6年目から焼畑耕地一面に育成する場合もある。

しかし二次林が生育し、その木陰に覆われるとねだけを地中に残して消失してしまう。したがって山茶は二次林の貧困な地域に多い

平安時代

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%B3%E5%AE%89%E6%99%82%E4%BB%A3>

平安時代（へいあんじだい、延暦13年（794年） - 文治元年（1185年）/建久3年（1192年）頃）は、日本の歴史の時代区分の一つである。延暦13年（794年）に桓武天皇が平安京（京都・現京都府京都市）に都を移してから鎌倉幕府が成立するまでの約390年間を指し、京都におかれた平安京が、鎌倉幕府が成立するまで政治上ほぼ唯一の中心であったことから、平安時代と称される。

永忠 えいちゅう

<http://www.omotesenke.jp/list2/list2-1/list2-1-1/>

茶が最初に中国から日本にもたらされたのは8世紀と考えられています。当時、日本は遣唐使を派遣して、唐の文化を積極的に受け入れていました。茶もまた、唐の最新の文化として日本に持ち帰られたのでしょ

う。確かな日本の正史に茶の記事がはじめて登場するのは、9世紀の初頭、嵯峨天皇の時代です。『日本後紀』の弘仁6年（815）4月22日の条に、嵯峨天皇が琵琶湖西岸の韓（唐）崎へ行幸した帰途、大僧都永忠より茶を献じられたと記されています。

永忠 えいちゅう

天平14年(742)-弘仁7年(816)。平安時代の僧。入唐して最澄らとともに帰朝し、近江の崇福寺・梵釈寺の検校をつとめた。

嵯峨天皇 さがてんのう

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B5%AF%E5%B3%A8%E5%A4%A9%E7%9A%87>

嵯峨天皇（さがてんのう、786年10月3日（延暦5年9月7日） - 842年8月24日（承和9年7月15日））は、日本の第52代天皇（在位：809年5月18日（大同4年4月1日） - 823年5月29日（弘仁14年4月16日））。諱は神野（賀美能・かみの）。

桓武天皇の第2皇子で、母は皇后藤原乙牟漏。同母兄に平城天皇。異母弟に淳和天皇他。皇后は橘嘉智子（檀林皇后）。

弘仁6年（815年）4月、近江国志賀郡への行幸中に梵釈寺で輿を停めた際、唐から帰国した僧である永忠が自ら点てた茶を飲んだとされる(『日本後紀』)

引茶 ひきちゃ

http://cha.sakai.ed.jp/tya/before_tya.html

「季御読経」における「引茶」で早くからお茶が飲まれていたということがわかる。「季御読経」は、聖武天皇のときにはじまった行事で、春と秋の二回、無事に暮らせる平和な国であるようにお祈りすることであり、その時に出されるお茶が「引茶」であった。

お茶はおもに、宮中でおこなわれる仏教の行事、特に春と秋に行われる季御読経の「引茶」で飲まれていた。

「引茶」のことが、はっきりと本にあらわれるのは平安時代も中頃になってから、『西宮記』『江家次第』『時範記』などの本に（村井康彦『花と茶の世界』）一つのきまった作法があってお茶がのまれているから、あとの時代のお茶会のもとになる形の一つであるだろう。嵯峨天皇の時代に、お茶をのむ記事がたくさんみられる。平安時代には身分の高い人たちがお茶をのむことが多かったようだ。

正倉院文書

<http://www.minpaku.ac.jp/ningenbunkashigen/monjo01/monjo.html>

正倉院文書とは、奈良時代に関する豊富な情報を含む、東大寺正倉院に保管されてきた文書群で、主に東大寺写経所が作成した帳簿群をいう。正倉院は、聖武天皇・光明皇后ゆかりの品をはじめとする、天平時代を中心とした多数の美術工芸品を収蔵していた施設で、奈良県奈良市の東大寺大仏殿の北西にある高床の大規模な校倉造倉庫である。ユネスコの世界文化遺産にも登録されている。

平城京跡

http://yamatoji.nara-kankou.or.jp/03history/01historic_sites/01north_area/heijokyuseki/

「平城宮跡」は、和銅3年（710）に藤原京より遷都された平城京の中心であった宮跡。1998年2月に「古都奈良の文化財」として、世界遺産に登録されました。

ニガナ

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%82%AC%E3%83%8A>

ニガナ（苦菜、黄爪菜[1]、学名：Ixeris dentata）は、キク科の多年草である。

路傍・田畑・山野に普通で環境により多形を示し、日本全土、東アジアの温～亜熱帯に分布する。高さ約40～70cmで、茎は上部が枝分れし白汁を有し、苦味が多く、和名の由来にもなっている[2]。根出葉は柄が長く、茎葉は基部が茎を抱き、下のものほど細長い。

5～7月に、黄色の5弁花に見える舌状花を5～7個もつ頭花を散状に開く。雄蕊は筒状に合着し、先が二つに分かれた雌蕊を抱く。

石・斗

<https://komonjyo.ne>

一石、一斗、一升ってどのくらい？石高解説

◎石高とは

江戸時代の人は、田畑・屋敷地などの生産高を「米の量」で表し、それを「石高（こくだか）」と言いました。畑や屋敷地は米を作りませんが、作ったと過程して畑や屋敷地にも石高を設定しました。お金で設定しろよ面倒くさいと思われた方、いいところをしていますが、それは現代の価値観です。何故なら江戸時代は今ほど貨幣は流通していません。よって昔の経済はお金ではなくあくまで「米の量」が基準です。

◎石高（容積）の単位

石高は容積の単位である石（こく）・斗（と）・升（しょう）・合（ごう）・勺（しゃく）、才（さい）で表します。1石=10斗、1斗=10升、1升（柶）=10合、1合=10勺、1勺=10才

◎一石、一斗、一升ってどのくらい？米一合は180mL=150g

一升（1升瓶）=1.8リットル。重さにして約2kg

一斗（10升瓶）=18リットル。重さにして約20kg（1升の10倍）

米一石の重さは150kg（米1合の1,000倍）

行基 ぎょうき

<http://www.maff.go.jp/chushi/kj/niki/4/qyouki.html>

行基は、天智（てんち）天皇が即位した668年、百済（くだら）系渡来人の家系に生まれました。幼い頃から非常な俊才（しゅんさい）であり、「瑜伽経唯識（ゆがぎょうゆいしき）（仏典）」を一読して即座にその奥義を理解したといわれています。やがて山林修行に入り、37歳の時、民間布教を始めたといえます。布教と同時に民衆救済のため、宇治川（うじがわ）や淀川（よどがわ）に橋を架け、河川改修も行なっています。また、各地で道路を造ったり、ため池を掘ったりしています。国からの資金援助はあえて求めなかったといえます。

行基は、その生涯で、橋6ヶ所、池15ヶ所、水路6ヶ所、船着場2ヶ所、堀4ヶ所、寺院は49ヶ所も建立しています。

行基は東大寺建立に協力したことで聖武天皇に敬重され、日本で初の大僧正（だいそうじょう）の位を授けられました。749年、80才でこの世を去りました。

日本後記

<http://www.archives.go.jp/exhibition/digital/rekishitomonogatari/contents/04.html>

『続日本紀』の次に編修された勅撰国史。桓武天皇の延暦11年（792）正月から淳和天皇の天長10年（833）2月まで、4代42年間の国の歴史が編年体の漢文で記されています。撰者は藤原冬嗣（ふじわらのふゆつぐ）・藤原緒継（ふじわらのおつぐ）ほか。仁明天皇の承和7年（840）に完成しました。

全40巻（現存10巻）。皇位をねらう道鏡に反抗した和気清麻呂（わけのきよまる）の忠烈を讃えて詳細な伝記を載せたほか、政治に対する批判を述べているのも本書の特色です。

近江国韓崎

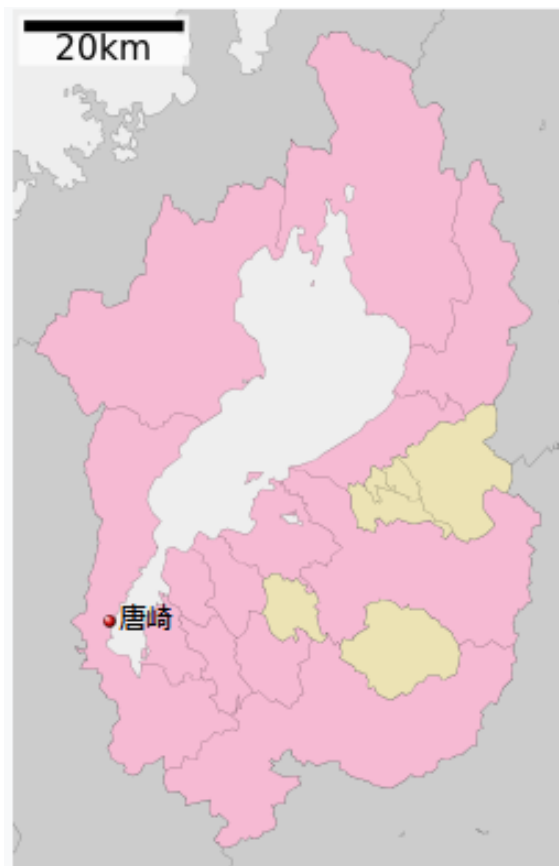
<https://www.asahi.com/articles/ASK636R07K63PTJB00M.html>

熊倉功夫・前静岡文化芸術大学長（日本茶道史）によると、日本の史料で最初に出てくる茶の記録は「日本後紀」だ。815年に嵯峨天皇が**近江国韓崎（現在の天津市唐崎）**に行幸した際、高僧が茶を煎じて嵯峨天皇に差し上げたと記録されている。熊倉さんは「嵯峨天皇が近江に茶園を造らせたとも記されており、最古の茶園の一つであることは間違いない」とみる。

◎唐崎 (大津市)

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%94%90%E5%B4%8E_\(%E5%A4%A7%E6%B4%A5%E5%B8%82\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%94%90%E5%B4%8E_(%E5%A4%A7%E6%B4%A5%E5%B8%82))

大津市の北部に位置する。琵琶湖の東岸にあたり、北で下阪本、南で際川、南西で蓮池町・滋賀里、西で弥生町、北西で穴太と隣接する。
奈良時代以前から地名として見られ、滋賀郡に属し、韓崎・辛前・辛崎とも書かれた[3]。万葉集の「さざなみの志賀の辛崎幸あれど大宮人の船待ちかねつ」の歌にも詠まれ、当時から港の機能を持っていたことが窺える。



殖茶

<https://ja-kyotoninokuni.or.jp/eat/tea.html>

日本の喫茶の起源は、歴史上に残る確かな記録としては、弘仁6年（815年）嵯峨天皇が近江の国唐崎に行幸された際、梵釈寺の僧永忠の煎じた茶を服されたことに始まります。そしてこの年から近江・丹波・播磨などの諸国に茶を植えさせ、毎年これを献上させました。

また、健保5年（1217年）京都梶尾高山寺の明恵上人は、喫茶養生記を著わしたことで有名な臨済宋開祖の栄西弾師より分与された茶種を、仁和寺・醍醐・宇治・葉

室・般若寺・丹波の神尾地方に分け植えたといわれています。これらのお茶が、山陰道を経て丹の国に伝えられ茶産地としての礎を築いたのです。

https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/139407/1/edsy10_153.pdf

f

帰国10年後永忠が嵯峨天皇にお茶を捧げた史実から見れば、以下の二点が推測できるのではないか。第一に、彼は唐から茶葉とお茶の種を日本に将来したこと；第二に、彼が自分の住んでいる寺院の境内あるいはその近くに茶樹を栽培したこと。そうでないと、なぜ10年以上たっても依然として天皇へお茶が捧げられるのか解釈しがたくなる。嵯峨天皇ご自身も永忠の献茶を大いに賞賛し、お茶のことをだいふ気に入ったようである。『日本後記』にはこのような記載がある。

「(同年) 六月壬寅、(嵯峨天皇) 令畿内并近江、丹波、播磨等国殖(“植”)茶、毎年献之。」
実際は、嵯峨天皇は永忠のところで初めてお茶に触れるわけではなさそうで、永忠もお茶を中国から将来した第一人者でもなさそうである。

最澄

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%80%E6%BE%84>

最澄(さいちょう)は、平安時代の僧(766/767年 - 822年) [2][3]。日本の天台宗の開祖であり、伝教大師として広く知られる。近江国(現在の滋賀県)滋賀郡古市郷(現在の大津市)もしくは生源寺(現在の大津市坂本)の地に生れ、俗名は三津首広野(みつのおびとひろの)。生年に関しては天平神護2年(766年)説も存在する。中国に渡って仏教を学び、帰国後、比叡山延暦寺を建てて天台宗の開祖となった。

空海

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A9%BA%E6%B5%B7>

空海(くうかい、宝亀5年(774年) - 承和2年3月21日(835年4月22日))は、平安時代初期の僧。弘法大師(こうぼうだいし)の諡号で知られる真言宗の開祖である。俗名は佐伯 眞魚(さえきのまお[1])。日本天台宗の開祖最澄と共に、日本仏教の大勢が、今日称される奈良仏教から平安仏教へと、転換していく流れの劈頭(へきとう)に位置し、中国より真言密教をもたらした。能書家としても知られ、嵯峨天皇・橘逸勢と共に三筆のひとりに数えられている。

行茶 ひきちゃ

<https://kotobank.jp/word/%E5%BC%95%E8%8C%B6-1581515>

茶葉を粉末にした抹茶(まっちゃ)のこと。碾茶(てんちゃ)ともいう。行茶、挽茶の字をあてることもある。一条兼良(いちじょうかねら)の『公事根源(くじこんげん)』によると、聖武(しょうむ)天皇の729年(天平1)禁中で衆僧を召して『大般若(だいはんにゃ)経』を読経させる季御読経(きのみどきょう)の制度が始まり、その第2日に衆僧に茶を賜る儀式があり、これを「引茶」または「行茶」と称していた。

季御読経はのち春秋二季に行われるようになったが、引茶は春のみに行われた。当時の茶は、団茶(だんちゃ)を砕いて薬研(やげん)で挽(ひ)いて粉末にし、湯が沸騰した釜(かま)の中に投じ、茶盞(ちゃさん)に入れていくもので、抹茶ではなかった。鎌倉時代、中国(宋(そう)代)から抹茶による飲茶法がわが国に移入され、茶園で茶を挽くという意から、引茶の字が使われるようになり、抹茶の異称となった。

季御読経 きのみどきょう

<http://kigosai.sub.jp/kigo500e/220.html>

宮中において二月、八月の二季に定例をもって行われた仏事。毎回四日間、大般若経の転読があり、威儀師が儀式作法の指揮にあたった。三日目に引茶という茶を僧に賜った。聖武天皇の天平年間に初めて行われたものという。

京都空也堂

https://ja.kyoto.travel/tourism/single02.php?category_id=9&tourism_id=166

也を本尊とするため空也堂と呼ばれるが、正しくは紫雲山光勝寺極楽院(しうんざんこうしょうじごくらくいん)と号する、天台宗の寺。天慶2年(939)、空也上人の開創といわれ、当初は三条櫛笥にあったので櫛笥道場とも市中道場とも呼ばれた。応仁の乱で焼亡したが、寛永年間に現在地に再建された。

空也は鐘を叩き念仏を唱えて全国行脚し、仏教の庶民階層への布教に尽力する傍ら、橋を架け、道路や井戸を整備し、野にある死骸を火葬して茶毘に付すなど社会事業も行った。そのため、空也は市聖とか阿弥陀聖と称され、後の一遍をはじめとする布教僧に大きな影響を与えた。

皇服茶 おうふくちゃ

<https://kyoto-design.jp/event/23681>

京都では、お正月に汲んだ若水を沸かし、小梅と結び昆布を入れた大福茶（皇服茶）を飲む習わしがあり、平安時代、当寺の開山である空也上人が病人に薬湯を飲ませて平癒させたという寺伝に基づいています。

村上天皇

<https://www.weblio.jp/content/%E6%9D%91%E4%B8%8A%E5%A4%A9%E7%9A%87>

村上天皇は944年に朱雀天皇の皇太弟となり946年に即位。摂政の藤原忠平の死後、摂政を置かず、みずから政務をとって天皇親政を目指した。菅原文時の「意見封事」を用いるなどして後に「天曆の治」と称された。

天徳四年内裏歌合せを主催するなど文化面でも評価されている。著書に家集「村上御集」、儀式書「清涼記」を撰述した。村上天皇の日記「村上天皇御記」は十世紀の天皇政務儀式を知る上で重要な史料といわれている。

空也上人 くうやじょうにん

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A9%BA%E4%B9%9F>

空也（くうや[1]）は、平安時代中期の僧。阿弥陀聖（あみだひじり）[2][注釈 1]、市聖（いちのひじり）、市上人と称される。口称念仏の祖、民間における浄土教の先駆者と評価される。空也流の念仏勧進聖は鎌倉仏教の浄土信仰を醸成したとされる[2]。

俗に天台宗空也派[3]と称する一派において祖と仰がれるが、空也自身は複数宗派と関わりを持つ超宗派的立場を保ち、没後も空也の法統を直接伝える宗派は組織されなかった。よって、空也を開山とする寺院は天台宗に限らず、在世中の活動拠点であった六波羅蜜寺は現在真言宗智山派に属する（空也の没後中興した中信以降、桃山時代までは天台宗であった）。

六波羅蜜寺

<http://rokuhara.or.jp/history/>

六波羅蜜寺は、天曆5年（951）醍醐天皇第二皇子光勝空也上人により開創された西国第17番の札所である。

当時京都に流行した悪疫退散のため、上人自ら十一面観音像を刻み、御仏を車に安置して市中を曳き回り、青竹を八葉の蓮片の如く割り茶を立て、中へ小梅干と結昆布を入れ仏前に献じた茶を病者に授け、歡喜踊躍しつつ念仏を唱えてついに病魔を鎮められたという。（現在も皇服茶として伝わり、正月三日間授与している）

現存する空也上人の祈願文によると、応和3年8月（963）諸方の名僧600名を請じ、金字大般若経を浄写、転読し、夜には五大文字を灯じ大萬灯会を行って諸堂の落慶供養を盛大に営んだ。これが当寺の起こりである。

福茶

<http://tokyo-cha.or.jp/article/fukucha2016.html>

福茶の由来

西暦960年ごろ、都で悪い病気が流行しました。空也上人が「観音様に献上したお茶を飲めば良い」との靈夢をみて、万民に施したところ、たちまちに病気が治りました。時の天皇「村上天皇」がこの功績を讃え、「皇（王）服茶」とし毎年祝い、万病を払う習わしとしたのが始まりとされております。

皇服茶の服が「福」に通じるところから「福茶」として新年のお祝い茶になりました。

室町時代には当時のお茶受けだった「梅干し・結び昆布・大豆」を入れて飲むようになりました。梅は年を重ね、昆布はお正月を喜ぶ、豆はまめに働く、このような願いをこめた言葉遊びから取り入れました。

八宝茶

<https://ocha-tea.jp/happoucyu/>

八宝茶は、中国回族（中国の少数民族のひとつでムスリム民族の集団）の人々が飲んでいた、伝統的な飲み物です。八宝は、中国語で『たくさんの』という意味があります。たくさんの種類の食材を混ぜたお茶というイメージです。

地方や慣習によってそれぞれのブレンドがあり、選ばれる食材も様々のようです。食材の例としては、陳皮（ちんぴ）やクコの実、蓮実、山査子（さんざし）、お

茶、雪菊、野苺、決明子、木耳（きくらげ）、菊、棗（なつめ）、胖大海（パンダーハイ）、龍眼（ロンガン）、レーズン、銀耳、杏子、など様々なものが挙げられています。

源頼朝

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%BA%90%E9%A0%BC%E6%9C%9D>

平安時代末期から鎌倉時代初期の武将、政治家。鎌倉幕府の初代征夷大將軍。河内源氏の源義朝の三男として生まれ、父・義朝が平治の乱で敗れると伊豆国へ流される。伊豆で以仁王の令旨を受けると北条時政、北条義時などの坂東武士らと平家打倒の兵を挙げ、鎌倉を本拠として関東を制圧する。

弟たちを代官として源義仲や平家を倒し、戦功のあった末弟・源義経を追放の後、諸国に守護と地頭を配して力を強め、奥州合戦で奥州藤原氏を滅ぼす。建久3年（1192年）に征夷大將軍に任じられた。

これにより、朝廷と同様に京の都を中心に権勢を誇った平家政権とは異なる東国に独立した武家政権が開かれ、後に鎌倉幕府とよばれた。

栄西

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%8E%E8%8F%B4%E6%A0%84%E8%A5%BF>

明菴栄西（みょうあん えいさい/ようさい） 永治元年4月20日（1141年5月27日） - 建保3年7月5日（1215年8月1日）は、平安時代末期から鎌倉時代初期の僧。日本における臨済宗の開祖、建仁寺の開山。天台密教葉上流の流祖。字が明菴[注釈 3]、諱が栄西。また、廃れていた喫茶の習慣を日本に再び伝えたことでも知られる。

建久2年（1191年）、虚庵懐徹より臨済宗黄龍派の嗣法の印可を受ける。同年、帰国。九州の福慧光寺、千光寺などで布教を開始。また、帰国の際に宋で入手した茶の種を持ち帰って栽培を始め、日本の貴族だけでなく武士や庶民にも茶を飲む習慣が広まるきっかけを作ったと伝えられる。

『喫茶養生記』 - 上下2巻からなり、上巻では茶の種類や抹茶の製法、身体を壮健にする茶の効用が説かれ、下巻では飲水（現在の糖尿病）、中風、不食、瘡、脚気の五病に対する桑の効用と用法が説かれている。このことから、茶桑経（ちゃそうきょう）という別称もある。

栴尾高山寺

https://ja.kyoto.travel/tourism/single02.php?category_id=7&tourism_id=432

774年（宝亀5）の開創。1206(建永元)年明恵上人が後鳥羽上皇の帰依を得て高山寺として中興開山した。栄西禅師から贈られたお茶の実を栽培し、苗が宇治へと伝わったことから、お茶の発祥の地として知られる。

国宝石水院は、鎌倉時代初期の寝殿造りの面影を残す貴重な遺構。鳥獣戯画4巻（国宝）など、洛西における文化財の宝庫。紅葉の名所。単立寺院。1994年（平成6）12月「古都京都の文化財」として、「世界遺産条約」に基づく世界文化遺産に登録された。

婆娑羅 ばさら

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%B0%E3%81%95%E3%82%89>

ばさらは、日本の中世、主に南北朝時代の社会風潮や文化的流行をあらわす言葉であり、実際に当時の流行語として用いられた。婆娑羅など幾つかの漢字表記がある。

身分秩序を無視して実力主義的であり、公家や天皇といった名ばかりの時の権威を軽んじて嘲笑・反撥し、奢侈で派手な振る舞いや、粋で華美な服装を好む美意識であり、室町時代初期（南北朝時代）に流行し、後の戦国時代における下克上の風潮の萌芽ともなった。

狂言

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8B%82%E8%A8%80>

狂言（きょうげん）は、能と同様に猿楽から発展した伝統芸能で、猿楽の滑稽味を洗練させた笑劇。明治時代以降は、能・式三番と併せて能楽と呼ぶことがある。

宋時代

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%8B_\(%E7%8E%8B%E6%9C%9D\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%8B_(%E7%8E%8B%E6%9C%9D))

宋（そう、拼音 Sòng、960年 - 1279年）は、中国の王朝の一つ。趙匡胤が五代最後の後周から禅譲を受けて建国した。国号は宋であるが、春秋時代の宋、南北朝時代の宋などと区別するため、帝室の姓から趙宋とも呼ばれる。国号の宋は趙匡胤が宋

州（河南省商丘県）の帰徳軍節度使であったことによる[1]。通常は、金に華北を奪われ南遷した1127年以前を北宋、以後を南宋と呼び分けている。北宋、南宋もともに、宋、宋朝、祖宋朝である。首都は開封、南遷後の実質上の首都は臨安であった。

臨濟宗

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%A8%E6%B8%88%E5%AE%97>

臨濟宗（臨濟宗、りんざいしゅう）は、中国の禅宗五家（臨濟、滄仰、曹洞、雲門、法眼）の1つで、日本仏教においては禅宗（臨濟宗・曹洞宗・日本達磨宗・黄檗宗・普化宗）の1つ。また、鎌倉仏教の1つである。

長崎県平戸

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%B3%E6%88%B8%E5%B8%82>

平戸市（ひらどし）は、長崎県北西部の平戸島とその周辺を行政区域とする市。長崎県最西端の市である。中心の平戸地区は旧平戸藩松浦氏の城下町で、鎖国前は中国やポルトガル、オランダなどとの国際貿易港だった。



富春園

<http://sandai-food.co.jp/wp/wp-content/uploads/2016/07/512f6d4ab358c287cd4f26fe54caa124.pdf>

長崎は日本茶発祥の地

古江湾(旧・葦の浦)長崎県平戸

1191年7月長崎県平戸の葦の浦(現・古江湾)に宋人・揚三綱の船で中国から帰国する。臨済宗の開祖といわれている僧・栄西禅師は、宋から帰国した際に、チャの種子を持ち帰りました。そして長崎県平戸の富春園に日本最初の茶園を開き、さらに福岡県と佐賀県との境にある脊振山に茶園を開いたと伝えられています。

栄西はまた、建仁2年(1202年)、源頼家の帰依を受けて、京都最初の禅寺、建仁寺を建立しました。その後、高山寺の明恵上人にチャの種を贈ったことから、京都にチャの栽培が広まりました。

脊振山 せふりやま

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%84%8A%E6%8C%AF%E5%B1%B1>

脊振山(せふりさん)は、福岡県福岡市早良区と佐賀県神埼市との境に位置する標高1,054.6m、脊振山系最高峰の山である。日本三百名山の一つ。

栄西が中国よりお茶の種を持ち帰り日本で初めて栽培し、日本の茶の栽培の発祥地とされる。

三代将軍実朝

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%BA%90%E5%AE%9F%E6%9C%9D>

源実朝(みなもとのさねとも、實朝)は、鎌倉時代前期の鎌倉幕府第3代征夷大将軍。

鎌倉幕府を開いた源頼朝の嫡出の次男として生まれ、兄の頼家が追放されると12歳で征夷大将軍に就く。政治は始め執権を務める北条氏などが主に執ったが、成長するにつれ関与を深めた。官位の昇進も早く武士として初めて右大臣に任ぜられるが、その翌年に鶴岡八幡宮で頼家の子公暁に暗殺された。これにより鎌倉幕府の源氏将軍は断絶した。

吾妻鏡 あづまかがみ

<https://www.weblio.jp/content/%E5%90%BE%E5%A6%BB%E9%8F%A1>

鎌倉幕府の事績を記した編年体の史書。五二巻。鎌倉幕府の編纂になるといわれる。1180年（治承4）から1266年（文永3）までを収める。幕府の公用記録のほか、「明月記」などの公家日記や古文書類を引用史料として編まれ、変体漢文で記されている。わが国最初の武家記録。

喫茶養生記

<https://kotobank.jp/word/%E5%96%AB%E8%8C%B6%E9%A4%8A%E7%94%9F%E8%A8%98-51067>

喫茶の効能や製法を述べた漢文体の書。上下2巻。禅僧栄西が承元5（1211）年著述。栄西が鎌倉下向の際、将軍源実朝に献上したもの。茶は仏教とともに中国から伝来したが、平安時代には上流貴族や僧侶の間で薬の一種と考えられ、長寿の妙薬とされていた。栄西も本書で茶の製法や効能を説き、喫茶による諸病の治療法を述べ、健康管理の必要を主張している。『群書類従』『大日本仏教全書』に収められている。

1214年、時の将軍源実朝が宿酔（ふつかよい）で苦しんでいるとき一服の茶とともに本書を献じたと《吾妻鏡》は伝える。漢文体で上下2巻。上巻は五臓に対する茶の効能、茶の栽培や製法などを説き、下巻では五病に対する桑の効能について記している。

徽宗皇帝 きそうこうてい

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%BD%E5%AE%97>

徽宗（きそう）は、北宋の第8代皇帝。諡号は体神合道駿烈遜功聖文仁德憲慈顛孝皇帝（退位したので「遜」（ゆずる）という文字が入っている）。諱は佶。第6代皇帝神宗の六男（第11子）。

書画の才に優れ、北宋最高の芸術家の一人と言われる。一方で政治的には無能で、彼の治世には人民は悪政に苦しみ、水滸伝のモデルになった宋江の乱など、地方反乱が頻発した。

茶筴

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8C%B6%E7%AD%85>

茶筴（ちゃせん）または茶筴とは、茶道において抹茶を点てるのに使用する茶道具のひとつで、湯を加えた抹茶を茶碗の中でかき回して均一に分散させるための道具。抹茶といえばこんもりと泡を立てた姿が有名であるために、泡だて器の一種と考えられることも多いが、泡を立てるための道具ではない。

茶筴の字はもともと鍋などの焦げ付きを落とす道具、**筴**（ささら）から由来している。芸術まで高められた高山（奈良県生駒市高山町）産の茶筴では「**筴**」の字を使うことが通例である。

茶筴

http://www.chikumeido.com/files/history_whisk.html

● 茶筴ではなく茶筴の理由

『茶筴』も間違いではなく、一般的にはこの字の方が多く使われておりますが、この字『筴』は、『ささら』に通じ『ささら』とは単に竹を割って紐等で縛っただけの物、桶、樽等を洗う道具のことで、『茶筴』ですと、意味が物を洗う道具になってしまいます。

『茶筴』は物を洗うものではなく、お茶を点てる茶道具なのです。『茶筴』は、お茶を点てる為にのみに作られた茶道具の一つで、美術品のように美しく仕上げられています。それ故、高山では古くからこの『茶筴』の字を用いております。皆様方もその理由をご理解いただき、この字をお使い頂ければ幸いにございます。

明恵上人 みょうえじょうにん

<http://www.horakuji.com/lecture/myoue/about.htm>

明恵上人とは、鎌倉期初頭に活躍した、華嚴宗中興の祖とされる人です。

明恵上人は、東大寺尊勝院の学頭に補任されるほど学徳高かった人です。しかし、仏教を学問的に理解する学僧達、いくら博識であっても自分の出世の手段としてのみ仏教を修学する僧侶達を嫌悪。結局、みずからは遁世して、ひたすら一途に仏道を修めています。

平安末期から日本を席卷していた、仏教における終末思想ともいうべき末法思想を背景に、天台宗から派生した日本独自の思想、法然の浄土教を激しく批判しています。

また、当時の法相宗の龍、笠置の 解脱上人貞慶 [じょうけい] や日本の臨済宗祖となった栄西 [ようさい] 禅師との親交をもっています。禅師が宋から将来した茶の苗を高山寺で栽培。明恵上人は、茶を冥想時の眠気覚ましの薬として用いたのですが、これが日本 に茶が広まる端緒となったとされています。

本茶

<https://www.ayataka.jp/story/otya/02.html>

明恵が柵尾に播いた種から育った茶は、いつしか茶園となり、その後約2世紀にわたって発展しました。川霧が深いなど、柵尾は茶栽培に適した条件が整っており、良質な茶が生産されました。その質の高さから柵尾で栽培されたお茶を「本茶」、それ以外の産地で栽培されたものは「非茶」と呼ばれるようになります。

龍団茶 りゅうだんちゃ

<https://tea-with.com/dark-tea-affairs-in-china/>

唐代に入ると、製法は幾分か改良され、少し複雑になりました。茶聖とも呼ばれた陸羽はこの時代の人ですが、その著書「茶経」の中で団茶の製法にも触れています。

茶経それによれば、収穫した茶葉を蒸熱、叩いて固めるところまでは変わりませんが、その後に1度炙り、できた団茶を紐で串刺しにして包んで乾燥させるという3つの工程が加えられています。

団茶の製法はその後、唐から宋代にかけて更に進化し、見た目にも美しい贅沢な品も作られるようになりました。唐、宋の両朝廷への献上茶「貢茶」に使われた「龍団鳳餅茶」は龍や鳳凰の姿が刻まれた鋳型を使って作られた特別な品でした。

<http://uedanobutaka.info/official/2016/01/20/%E4%B8%80%E7%A2%97%E3%80%80%E8%8C%B6%E3%83%BB%E3%83%81%E3%83%A3%E3%83%BB%E3%81%A1%E3%82%83%E3%80%80part2%E3%80%80%E5%AE%8B%E3%81%A8%E6%98%8E%E3%81%AE%E3%83%81%E3%83%A3/>

宋の第二代皇帝太宗の時、太平興国二年（977）に五代の頃からすでに茶の生産が盛んであった福建の建安にある北苑に官営の茶園が開かれた。龍焙（りゅうばい）である。天子に供し、宮中で使われるための茶が作られる茶園ができたのである。そこで作られる龍鳳茶、あるいは、龍団茶は極めて貴重なものだった。「宮中の人たちでも容易（たやす）く下賜されるようなことはない。南郊大礼致斎の夕、樞密院各四人に共に一餅を賜うのみである。

朱元璋 しゅげんしょう

<https://www.y-history.net/appendix/wh0801-003.html>

貧農に生まれ、元末の紅巾の乱に加わって頭角を現し、転じて反乱を鎮圧する側に廻り、1368年に明を建国して初代皇帝となった。廟号は太祖、諡号が洪武帝。都は南京。皇帝権力の専制化に努め、儒教道德の強化などを行った。

清規 しんぎ

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B8%85%E8%A6%8F>

清規（しんぎ）は正式には清浄大海衆 規矩準繩（しょうじょうだいかいしゅう きくじゅんじょう）と言ひ、仏教の一宗派である禅宗の集団規則である。

唐代中期に百丈懐海が制定したと言われ、内容はそれまでの戒律を基に、仏教教団としては異例の自給自足体制を確立させた禅宗教団に適合するような、主に集団生活を適正に維持するための規則である。

この百丈が制定した清規は、『百丈清規（中国語: 百丈清規）』と言われているが、散逸してしまい現存せず、『百丈古清規』として断片が再編集され、現在に伝わっている。

沙石集 させきしゅう

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B2%99%E7%9F%B3%E9%9B%86>

『沙石集』（しゃせきしゅう / させきしゅう）は、鎌倉時代中期、仮名まじり文で書かれた仏教説話集。無住道暁が編纂。弘安2年（1279年）に起筆、同6年（1283年）成立。その後も絶えず加筆され、それぞれの段階で伝本が流布し異本が多い。記述量の多い広本系と、少ない略本系に分類される。『沙石集』の名義は「沙から金を、石から玉を引き出す」ことをいい、世俗的な事柄によって仏教の要諦を説く意味であると言われている。僧侶の立場から経典を多く引用しているが、作者が博識であり好奇心に富んでいるため、単なる説教を脱化して興味津津たる文学作品となっている。

日本・中国・インドの諸国に題材を求め、靈験談・高僧伝から、各地を遊歴した無住自身の見聞を元にした諸国の事情、庶民生活の実態、芸能の話、滑稽譚・笑話まで実に多様な内容を持つ。その通俗で軽妙な語り口は、『徒然草』をはじめ、後世の狂言・落語に多大な影響を与えた。

奈良西大寺

<https://narashikanko.or.jp/spot/temple/saidaiji/>

称徳天皇の勅願により、常騰を開基として天平神護元年（765）に創建されました。当時は広大な寺域に多数の堂塔が建ち並び、東大寺と共に栄えていましたが、承和13年（846）以後数多の火災にあい、創建当時の建物はほとんど焼失しました。鎌倉時代に叡尊により復興されましたが、戦国時代には再び火災で焼失しました。現在残っている本堂（重文）、愛染堂（重文）、四王堂（重文）などは江戸時代中期に建てられたものです。叡尊が始めた「大茶盛」の寺としても有名です。

叡尊 えいそん

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%A1%E5%B0%8A>

鎌倉時代中期の日本の人物で、真言律宗の僧。字は思円（しえん）。諡号は興正菩薩（こうしょうぼさつ）。興福寺の学僧・慶玄の子で、大和国添上郡箕田里（現・奈良県大和郡山市内）の生まれ。廃れかけていた戒律を復興し、衰退していた勝宝山西大寺（南都西大寺）を再興したことで知られる。

<http://meguru.nara-kankou.or.jp/inori/special-interview/kowa14/>

「不殺生戒」の実践として、叡尊上人は宇治川の漁師に漁をやめさせ、代わりにお茶の栽培を教えました。これが今の宇治茶隆盛につながっています。

—現在多くの参詣者が集う「大茶盛」も、叡尊上人由来の行事だそうですね。
大矢長老：1239年1月、八幡神社に献茶した余服を叡尊上人が民衆に振る舞ったことに由来します。困窮者救済に尽くされた叡尊上人は、茶盛を通じて、当時高価な薬とされていたお茶を民衆に施されたのです。寺で酒は飲めませんから、酒盛ならぬ茶盛と呼んだのですが、一つの碗で回し飲みすることには「一味和合」、貧富の差も、敵も味方もなく和み合おうとの意味も込められています。

儲茶 ちょちゃ

<https://blog.goo.ne.jp/meisogama-ita/e/7c9e68046fc5e52a306481a99721e629>

禅に裏打ちされた抹茶の喫茶方法は僧侶や武士階級を中心に、普及していきます。

「施茶（せちゃ）」と「儲茶（ちょちゃ）」

「施茶」は社寺で神仏に茶を供した後、僧侶や一般庶民に施したお茶の事です。いわゆる、公の場で供せられたお茶と言えます。「儲茶」は、自らの健康を目的に、又は嗜好の為に飲んだお茶と、解されています。それ故、私的な喫茶法と言えます。

禅宗 ぜんしゅう

<https://kotobank.jp/word/%E7%A6%85%E5%AE%97-88346>

自己の仏性を内観することを目的とする仏教の一派。仏心宗ともいう。特に坐禅を重んじることに特徴がある。インドの菩提達磨によって中国に伝えられたので、達磨を宗祖とする。第5祖弘忍の門下に慧能と神秀が出て、2派に分れ、禅宗を盛んにした。慧能の系統を南宗といい、神秀の系統を北宗という。南宗はさらに2派に分れ、青原(せいげん)が曹洞宗を興し、南嶽は臨済宗を興した。日本へは鎌倉時代にこの2派が道元と栄西によって伝えられ、現在にいたっている。江戸時代に明の隠元が日本に渡って黄檗宗を伝えた。

金沢文庫

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%91%E6%B2%A2%E6%96%87%E5%BA%AB>

鎌倉時代中期の日本において、金沢流北条氏の北条実時が設けた日本最古の武家文庫。所在地は神奈川県横浜市金沢区金沢町142。

金沢流北条氏が領し、のちに館や菩提寺である称名寺を建立して本拠地として開発し、家名の由来となった地である武蔵国久良岐郡六浦荘金沢郷に所在したことが名称の由来である。現在は「神奈川県立金沢文庫」の名称で県立の歴史博物館となっており、様々な所蔵品を保管・展示している。

称名寺 しょうみょうじ

https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/kids/jh/kjh_sa13.html

阿弥陀三尊をまつる寺院で、九十九(つくも)谷といわれる峰々(みねみね)が集まり、木立に囲まれた境内は、滝の音や川のせせらぎが響く静かな場所です。もとは円宗寺という寺で、弘法大師(空海)が開いたと伝えられ、不動堂の別当(べつとう)寺です。源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、代々の将軍や北条氏は必ずここにお参りしたといわれています。

その後、江戸時代に直誉蓮人(ちよくよれんにゅう)が本堂を再興して現在に至っています。男(お)滝・女(め)滝と呼ばれる陰陽の滝のほか、石段を上ると改築した不動堂があり、境内には多数の石仏を見ることができます。

異制庭訓往来 いせいていきんおうらい

<https://kotobank.jp/word/%E7%95%B0%E5%88%B6%E5%BA%AD%E8%A8%93%E5%BE%80%E6%9D%A5-30937>

『新撰之消息』『百舌鳥往来』『森月往来』などともいう。南北朝時代の初学者向け教科書。1巻。江戸時代、虎関師錬の編とされたが、定かでない。正月から12月までの行事や風物を述べた贈答の手紙を掲げ、貴族社会における知識百般を体得できるように工夫されている。中世往来物の一つ。『群書類従』所収。

仁和寺

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%81%E5%92%8C%E5%AF%BA>

仁和寺（にんなじ）は、京都府京都市右京区御室にある真言宗御室派総本山の寺院。山号は大内山。本尊は阿弥陀如来、開基（創立者）は宇多天皇。「古都京都の文化財」の構成資産として、世界遺産に登録されている。

醍醐

<https://kotobank.jp/word/%E9%86%8D%E9%86%90-91079>

京都市伏見区の一地区。旧村名。1931年京都市に編入。山科盆地の南方に位置し、古くは大和から近江にいたる交通の要地。大規模な住宅団地があり、京都市の新しい住宅地区となっている。醍醐山に真言宗醍醐派の総本山醍醐寺があり、五重塔をはじめ、金堂、薬師堂などの国宝建造物のほか著名な書画、彫刻を所蔵、それらの多くは国宝に指定されている。山麓の門前町には秀吉が造らせた三宝院庭園（特別史跡・名勝）がある。



宇治

<https://kotobank.jp/word/%E5%AE%87%E6%B2%BB-34457>

京都府宇治市の中心市街地。『倭名類聚抄』の久世郡宇治郷にあたる。菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の離宮があったと伝えられ、古代より木津として宇治川を利用した木材運送の中継地であった。また、渡しとして奈良と京都を結ぶ交通の要地であった。大化2（646）年にはすでに宇治川に橋がかけられ、12世紀以後は佐々木高綱の宇治川先陣で名高い源平合戦（→宇治川の戦い）など、たびたび戦場となった。中世以降、宇治茶の産地として有名。藤原道長の別業であり、のちに藤原頼通が仏寺とした平等院や、黄檗宗大本山の萬福寺がある。



葉室

https://www.google.com/search?client=firefox-b-d&q=%E8%91%89%E5%AE%A4%E3%80%80%E4%BA%AC%E9%83%BD&npsic=0&rffq=1&rlha=0&rlag=34989184,135687464,126&tbm=icl&ved=2ahUKEwig39Sd_PfjAhUkxosBHb8tDDMQtgN6BAgKEAQ&tbs=lr:1,lf:1,lf_ui:2&rlidoc=1#lfi=hd::si::mv:!1m2!1d34.989629!2d135.6889235!2m2!1d34.9887398!2d135.6860055!3m12!1m3!1d442.63641336413406!2d135.6874645!3d34.98918439999999!2m3!1f0!2f0!3f0!3m2!1i68!2i26!4f13.1;tbs:lr:1,lf:1,lf_ui:2



<https://wanosuteki.jp/hamuroke>

葉室家（はむろけ）は、名家の家格を有する藤原北家勸修寺派の公卿で、藤原高藤の後裔で、参議藤原為房の二男・顕隆を家祖とします。

家名は、3代光頼が洛西葉室（京都市西京区山田）に営んだ別業に因み、同地に建立された「浄住寺」を菩提寺としています。